

短期海外研修による教育的効果の再検討

——学生の報告書の多面的な分析を通して

小林文生

問題意識

今日、様々なメディアや教育関係機関において「グローバル人材」の必要性が叫ばれている。このことは、学生の留学を促進する動きとあいまって高等教育での大きな課題と捉えられている。その一方で、学生の「内向き志向」がしばしば指摘され、どのように学生の目を海外に向けさせるかについて様々な議論が続けられている。例えば、ウェブマガジン「留学交流」では、留学のメリットを学生に示し、どのように留学へのモチベーションを高めるかといった点や、留学体験をどのように学生の成長やキャリアデザインに活かせるよう支援体制を整えるかに着目した特集が組まれた。

このような現状において、留学を促進する上で有効なツールとなり得るものが短期海外研修と呼ばれるものである。一般には、2～4週間程度、海外で現地の言語や文化についての学習を行うものである。長期の留学に比べ、経済的負担も軽く、大学の長期休業期間に行われるものであれば、学生が懸念する留年等の心配もない。加えて、一部の研修では単位化されているものがあり、単位取得のベネフィットも手伝って学生が比較的参加しやすい形態である。

但し、その内容や定義に統一されたものではなく、ボランティアやインターンシップを行うもの、語学学習に特化したものなど様々ある。名称も語学研修や海外実習、スタディーツアーなどと呼ばれることもあり（工藤、

2011), 多種多様なフォーマットが存在する。横田らの調査によると, 約7割の大学が上記のいずれかの形式の研修を実施しており(横田ら, 2006), 本論文で短期海外研修(韓国)の有効性を検証することは一研修の改善のみならず, 短期的なプログラム全体への提言を行うことに繋がる。

短期海外研修の役割

短期海外研修に求められる役割とはどのようなものであろうか。1つには, 留学という選択肢の多様化が考えられる。半年や1年といった比較的長期の留学は多大な費用がかかる。また河合(2011)が指摘するように, 長期の留学に出た場合, かなりの割合で4年間での卒業が困難になっていることなどから, 学生は留学をためらってしまう。そのような学生に, 海外での経験を積ませること, 異文化に身を置くという機会を提供するといった役割が短期海外研修には考えられる。

加えて, 長期留学への橋渡しという役割も考えられるだろう。いわゆる内向きと呼ばれる学生たちも, 必ずしも海外に無関心というわけではない。経済的理由以外に, 自信の欠如からくる躊躇というものがある。短期海外研修は比較的短期間で, プログラムによっては大学からの支援体制も手厚い。負担とならない期間や, 大学からのサポートが学生の不安を軽減し, 海外への一歩を踏み出しやすくする役割がある。一歩踏み出しさえしてくれれば, 学生は海外での体験を通して, 新たな刺激を受けることに喜びを見だし, 自分もやっつけられるのだという自信を持つであろう。その結果, 半年や1年の長期留学を考える始める者も少なからずいるに違いない。

もちろん, 上記2つの機能は十分に意識されるべきであるし, そのために今後も有効な短期海外研修のプログラム開発・改善・実施に努めるべきである。しかしながら, 本論文では研修それ自体の教育効果に特に焦点を当てる。即ち, 短期海外研修を通して, 異文化体験や語学を含む多様な側

面における学生の成長を引き出すという役割について検討する。

短期海外研修の可能性

短期海外研修等のプログラム評価については、今までに様々な知見が蓄積されてきた（例えば渡辺，2009 など）。これらの調査から，語学研修は語学運用能力の向上，学習意欲の向上，異文化理解・国際理解の向上，滞在国へのイメージの向上などに貢献することが示されている。しかし，工藤（2011）が指摘するように，これらの先行研究では研修の教育効果の一部を部分的に捉えており，その中身について多面的かつ具体的に検討したものが少ない。工藤の指摘に従えば，短期海外研修の教育的効果を一層高めるためには，研修を多面的に検討し，その分析をプログラムの教育効果の改善という観点から研修に組み込んでいくというサイクルが必要であると考えられる。

教養教育としての短期海外研修

本学では，短期海外研修はいわゆる一般教養にあたる全学共通教育科目の単位として認定されている。このことは，短期海外研修という授業が，教養教育が目指している目標を達成するようカリキュラム作りがなされていないということの意味している。

総合大学における教養教育の意義は，専門教育を学ぶための素地，また，知識人として身につけておくべき幅広い見識を育むという観点が重要視されていた。しかし現在では，既存の知識を得るという「受動的な知」ではなく，既存の情報を用いて新たに問題を立て，知識を構築し，発信していくという一連「能動的な知」の育成に重点が置かれるようになってきている（荻屋，1998；小林，1998）。

このような能動的な知を学び，実践に移す場として，短期海外研修は理

想的な場であると考えられる。なぜならば、海外という普段と全く異なる環境においては、自動化された知識の適用が機能しない場面に度々遭遇することとなるからである。そういった場合、既存の情報の安易な適用ではなく、現地の経験を通じて獲得された知識と既存知識を踏まえて推論し、問題解決にあたらなければならない。更には、このような活動を繰り返す中で、既存知識と新たに獲得された知識は比較され、もとあった知識は相対化されるとともに、知識全体の再構造化や知識間をまたぐ抽象化されたメタ的な知識が生成される。このような活動は、まさに能動的な知の実践場面であり、短期海外研修を教養教育の観点から捉え直し、教養教育の目的を意識しながら、研修の実践・指導にあたることで、更なる教育的効果が期待できる。

社会人基礎力との関係

近年、社会人基礎力という概念が着目されている。これは、2005年に経済産業省において開かれた「社会人基礎力に関する研究会」（座長・諏訪康雄法政大学大学院教授）が、昨今の人材育成に関わる課題として若年層にみられる「仕事の現場で求められている能力」について検討を行い、生成した概念である。

この社会人基礎力という概念は、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という上位要素とそれらを構成する「主体性」「課題発見力」「発信力」といった12の具体的な能力要素からなる（経済産業省、2010）。この能力と短期海外研修を対応づけて考えると、非常に親和性が高いことが窺える。短期海外研修では、未知の場面に遭遇することが多く、自ら一步踏み出す勇気が求められる場面が多々ある。また、短期とはいえ異文化の中で生活を余儀なくされる過程において、アイデンティティの再考やコミュニケーションギャップ、言葉の壁などに遭遇することが予想される。短期海外研修は、学生にそれらの問題をどのように解決するかとい

う継続的思考を促す機会となり得る。また、研修の性質・種別にもよるが、異国での生活のため、同じ研修仲間との行動が比較的多くなると考えられる。遊びに行くこと1つをとっても仲間との調整やコミュニケーションが必要となる。集団でのプレゼンテーションや調査など、研修内容・課題を付加することで、学生のチームとして協力して作業する能力を高めることも可能である。

以上で述べたように、短期海外研修は、今まで指摘されてきた異文化理解・異文化教育等の側面に加え、教養教育で主眼とされる能動的な知、さらには社会人基礎力といった能力を高めるのに相応しいプログラムである。

そこで、本論文では、短期海外研修（韓国）において、学生がどのような学びを得たかをできるだけ多面的に検討を行い、研修の効果を確認する。また、細かな事例に着目することで、今後上記で述べた様々な研修効果の最大化に向けた改善の手がかりとなるものを浮き彫りにし、今後の研修に役立てることを目的とする。

分析の対象と枠組み

本調査では、学生の多様な学びを捉えることが目的である。しかし、客観的な指標による学びの把握では、語学力など比較的測定しやすいものばかり焦点が当たってしまう可能性がある。そこで本調査では、その問題を回避するために、学生が研修成果を自ら評価した報告書を分析の対象とし、できるだけ多様な学びを拾い上げることができるよう留意する。

報告書は、学生によってなされる一種の体験・記憶の振り返りであり、報告書をまとめた段階での、学生の研修に対する主観的な意味づけの集合体である。これを分析対象とすることは、具体的な知識の獲得や技術の習得の把握というよりは、学生が研修の中でどのように個々の出来事を捉え、どのように解釈し、どのように意味づけているのかという主観的経験を捉えることを意味する。

短期海外研修の大きな利点としては、海外に対する見方の変化、普段と異なる生活での問題解決を通じた成長、自分の価値観の相対化など様々な要素を挙げることができる。そういった変化は、客観的指標よりもむしろ学生の内側で語られる物語の意味づけの変化として捉えることがより適切のように思われる（工藤，2011）。従って、本調査では主観的に記述された報告書を分析の対象とする。

なお、回顧的なデータは、記憶が薄れる、或は記憶が再構築されるという可能性から、データの信頼性についてしばしば指摘を受けてきた（e.g., Ericsson & Simon, 1993）。しかし、この批判は過去の客観的事実に対して認知の偏りが及ぼす影響が問題になるからであり、本調査のように現在の解釈、即ち過去の体験をどのように位置づけるか、現在自分（報告書作成時）にとってどのような解釈が成り立つのかを重要視する本調査ではさほど懸念する必要はないと考えられる。

調査の方法

短期海外研修（韓国）の概要

本研修は、一般教養の授業科目（冬学期2単位）の授業として実施された。事前の授業オリエンテーション、説明会及び学内での研修告知を通じて履修希望者を募り、選考によって最終参加者6名を決定した。

研修先である西江大学は交換留学の協定校であり、西江大学内の語学院（語学研修を主に担当する機関）の韓国語教育は会話重視で高い評判を得ている。

本研修の目的は、海外で実力を発揮できる力をつけること、また、なかなか増加しないアジアへの派遣留学数の増加に寄与するために、学生に韓国・韓国語に対する関心を持たせることである。もちろん、異文化理解や異文化間コミュニケーションに関する学習も視野に入っている。

研修内容については下記にある通り、事前授業（Table 1）、現地での一

橋大学独自プログラム (Table 2), 西江大学での授業及び文化体験プログラム (Table 3), 帰国後の報告会, 報告書作り (Table 1) からなり, 全ての過程を総合して成績評価を行う。

Table 1 一橋大学で実施された事前・事後研修

事前研修 (授業等) 2011年10月～2012年2月	
日程	内容
2011年10月5, 12日	授業ガイダンス (内容は両日とも同じ)
11月30日, 12月7日	研修プログラム説明会 (内容は両日とも同じ)
12月4日	願書提出締切日
12月21日	研修参加者選考
2012年1月11日	①駐日韓国大使館韓国文化院長沈東燮 (シム・ドンゾプ) 先生による講演 (韓国の歴史と韓国人と日本人の文化的な違いについて), ②研修の手続き・旅行関係の説明, 必要書類記入セッション
1月18日	①参加者自己紹介と研修目標決定, ②韓国人留学生による現在の韓国事情に関するプレゼンテーション, ③韓国人留学生との交流, ④韓国での携帯電話に関する説明
1月25日	①韓国文化についての学習: 韓国映画を鑑賞し, 日韓の文化の違いについて討論, ②韓国事情に関する講義
2月8日	危機管理セミナー
2月15日	①渡航前オリエンテーション (海外旅行・海外生活における危機管理を中心に), ②異文化理解に関する講義
事後研修 2012年4月～9月	
2012年4月6日	報告会: 研修前の目標がどの程度達成されたかという観点から, 研修の成果を学生がプレゼンテーション
1月～9月	報告書作成作業: 学生が定期的に集まり作業

Table 2 一橋大学 独自プログラム (2月27日～3月2日)

主なプログラム項目	概要
水原 SAMSUNG 広報館見学	韓国を代表する企業である SAMSUNG の広報館を訪問し、社史、最新製品、世界的観点からみた家電産業等についてのレクチャーを受けた。
KDDI 韓国オフィス訪問 (如水会 OB 企業訪問)	如水会 OB が勤務されている企業である KDDI 韓国オフィスを訪問し、韓国の通信事業を日本との対比を通してというテーマでレクチャーを受けた。また、KDDI データセンターの見学も同時に行った。
如水会ソウル支部 OB との交流・懇親会	一橋大学 OB 組織である如水会ソウル支部との交流の場を設け、海外で働く意義など先輩の視点から現役学生にアドバイスがあった。
韓国総同窓会訪問及び交流・懇親会	一橋大学で留学生として学んだ卒業生により組織された OB 会。ここでも留学という観点などから学生に多様なアドバイスがあった。
韓国文化体験	キムチ作り、韓国の伝統茶の試飲、韓国の最近のトレンドを取り入れた喜劇の鑑賞を通じて韓国文化の理解を深めた。
板門店・DMZ 見学	板門店、非武装地帯、第三トンネル等を見学し、韓国・朝鮮半島の歴史についての認識を深めた。

Table 3 韓国西江大学での主な研修プログラム (3月5日～3月23日)

主なプログラム項目	概要説明
韓国語授業	レベルに応じてクラス分けが行われ、韓国語授業が実施された (4時間×14日)。
韓国学	韓国の歴史や文化、経済などについての講義。日本語で実施された (週2回×3週、各75分授業)。

バディとの交流プログラム	日本に留学予定の学生を中心に構成された研修のサポート役であるバディと呼ばれる学生との交流。生活の相談や語学学習の補助、学内の案内や食事に誘ってくれるなど、交流を積極的に行ってくれる。
ソウルシティーツアー	バディを中心に、韓国の名所を1日かけて巡り、文化学習・交流活動を目的とする。
全州フィールドトリップ（一泊）	バディも付き添い、全州にて韓国の伝統文化を体験学習
日本語・日本文化専攻韓国学生の授業へのクラスパーティシペーション	日本語・日本文化を学ぶ授業に補助・ゲストとして参加。交流を主たる目的とする。

学生の学びの評価の方法

本調査では、学生が帰国後作成した報告書（学生が事前授業で立てた目標がどの程度達成されたかという観点から作成されたもの）を分析の対象とする。この報告書は、3月の研修を終え、4月の初旬に報告会で研修の報告がなされた際の原稿を土台とし、その後7月にかけて報告書としてまとめ上げたものである。但し、国際教育センターより発行された冊子体（2012）に掲載されたものではなく、その一つ前の草稿を分析対象とした。これは、冊子体にはページ制限を設けざるを得ず、学生の一部の報告が割愛されてしまったためである。

結果と考察

学生が自身で立てた事前の研修目標をどの程度達成できたかについて作成した報告書を分析対象とした。学生の多様な学びという観点から、学生が言及している学びに関係する記述を抜き出し、KJ法を用いてカテゴリ化を試みた。以下、カテゴリ名とそのカテゴリを代表する記述例を挙げる。なお、括弧内は、何名の学生が各カテゴリについての言及を行ったかの割合である。

1. 語学の成果

全ての研修参加学生、6名（100%）が語学についての成果や語学の上達に関する言及をおこなっていた。これは本研修の多くの部分が西江大学における韓国語授業に占められるためと考えられる。また、語学の習得・上達が参加した学生の当初の大きな動機であったためと考えられる。これは、研修後に行った事後アンケートからも支持される点であり、他の短期海外研修同様、学生の意識や学習の重点が語学に当てられていることを示している。典型的な記述としては、

S-1：まず、語学の上達としては、やはり4週間の研修で得たものがたくさんあった（中略）。自分の考えをうまく伝えられないことに歯がゆさを感じる一方で、韓国語で自分の思っていることを伝えられた時は、やはり通じることに対する喜びがあった。もちろん日本語のようにスムーズでもなければ、100%思った通りのことがいえるわけでもなかったが、勉強の成果を少しずつでも感じる事ができてよかった。

上記では、現地だからこそ得られる語学学習の難しさと喜びが記述されており、短期とはいえ語学を現地で学ぶことの意義が改めて確認される記述である。

2. 困難・トラブル・フラストレーション

通常の大学生活とは異なる環境での学習であり、また、韓国という異国での学習であるため、様々な困難や心理的フラストレーションを問題として挙げる記述が見られた（4名、66.67%）。例えば、

S-3：研修前は基本的な単語と文法を学んだだけで、実際に韓国語を話す機会はほとんどなかったため、つたない韓国語になってしまうの

はやむを得なかった。自分の知っている単語が限られているため、言いたいことをうまく伝えられなかったり、話題をひろげられなかったりしてもどかしい思いをすることもあった。(中略) そのようにしてなんとか会話を進めていると、私が日本語や英語で伝えた部分を相手が韓国語訳してくれたり、文法の不自然な部分を訂正してくれたりしたため、ちょっとした会話の中でも多くのことを学ぶことができた。教えてもらった言い回しや単語などを逐一メモし、記憶していったことで、この短期間で語彙力は相当上がったし、現地でしか知ることのできない言葉や、学校では習わないような微妙なニュアンスなども学ぶことができた。

上記では特に、自らの表現したいことと語彙力・文法等の知識との乖離による葛藤がみられる。しかし、その困難に自分なりに工夫し、問題を一つ一つ解決していきながら語学パートナーと会話を続けることで問題を克服し(3. 学習上の工夫・努力)、語学の上達を実感していることがわかる(1. 語学の成果)。着目すべきは、そのような語学上の問題が授業外の記述であるという点である。日常生活上での言語表現や友人、語学パートナーとのコミュニケーションの中での困難を取り上げているということは、現地の生活やネイティブとの会話から積極的に学ぼうとしている姿勢の現れと解釈することができる。また、敢えて報告書にその困難や葛藤を記載していることから、学生たちはその困難や葛藤に遭遇したことに何らかの意味を見出していると推察される。

3. 学習上の工夫・努力

このカテゴリに当てはまる記述は5名の報告書に見られた(83.33%)。上で見たように、半数以上の学生が学習上の問題、フラストレーションを抱えており、また、そういった経験に学生自身が何らかの意味付けを行っている点を指摘した。そういった意味付けは、単に困難等に遭遇したから

なされたのではなく、学生それぞれが問題に対して、自分なりに工夫や努力を行ったためだと考えられる。

S2：相手がどれだけ日本語が上手くとも、わかる範囲では全て韓国語で話しかける努力をした。（中略）わからない言葉や表現がある度に、相手に尋ねたり、ホテルに帰ってから調べたりなどして語彙を増やすよう努めた。

S1：研修中はみんなでわからない単語はすぐに調べてノートに書き、それをシェアするようになっていたのだが、研修が終わるころにはかなりの量の単語になっていた。私はできる限り、一日の終わりにそのノートを復習するようになっていたのだが、それだけでも語彙力がかなりのびたように思う。

上記の記述から、学生の学習への積極的な態度や、より効果的な学習への工夫が見て取れる。特に、現地での生活から多くの学生が語彙力の不足を感じており、その問題に対してどのように解決すべきかを工夫しながら模索している様子が見て取れる。また、問題から解決の努力、過程を報告書に敢えて記載していることから、こういった努力の過程を学生自身が重要視していることが示唆される。

4. 学習に関する刺激・モチベーション

これは、現地での生活を過ごす中で、研修先である西江大学の学生や韓国学生・韓国一般の人々の様子を見聞きし、刺激を受け、韓国語や韓国文化に限らず、学習への動機付けの高まりを示す記述である。4名の報告書に該当の記述が見られた（66.67%）。

S6：現地の学生から刺激を受けるという点では、語学力の違いが身に

しみた一ヶ月であったといえる。観光業が盛んな国であるため、明洞などの観光地では店員さんは皆、日本語が上手に話せるし、恐らく中国語や英語といった外国語もはなせるのであろう。(中略)それは職業のためであるとしても、学生たちが日本語や英語といった外国語を話せる割合は日本より遥かに高いのではないだろうか。(中略)日本の外国語に対する教育制度の違いを感じたと同時に、韓国の学生の勉強熱心なところは見習うべきところであると思う。

上記の記述では、研修先の西江大学の学生だけでなく市街の店員の観察に基づいて、自分や日本人学生の語学力と比較し、その違いや語学運用能力の差に触発され、多いに刺激を受けている様子が示されている。一般に、韓国の大学生は熱心に勉強に取り組むことが知られており、このような勉強への取り組み方、姿勢を感じ取ることができるのは韓国研修特有の強みではないかと考えられる。そのような学生の受け止め方がわかる記述としては、下記が挙げられる。こういった記述は4名の学生全てにみられた。

S1：韓国の学生の多くが大変な努力家であり、様々なスキルを身につけているということは間違いないし、競争心をもって勉強している姿は自分も見習わなければ…という刺激になった。

上記の記述は、韓国学生の勉強・資格に対する努力に刺激を受けている記述である。この記述より、短期海外研修は、語学のみならず学習者自身の学習態度を見直させ、今後の学習に対するモチベーションを高める契機となる可能性を秘めている。

5. 異文化体験

このカテゴリは、異文化で生活することで日本との様々な差異について生じた様々な気づきについての記述である(6名, 100%)。このカテゴリ

は、短期海外研修や留学で経験される主要なものであり、語学学習とともに短期海外研修でもっとも生じやすい学びと考えられる。また、短期海外研修の学習目的の大きな柱を成すものでもある。深い文化の学習や文化の違いに関する洞察、文化に対する相対的価値観の獲得は、短い短期海外研修では難しいとの指摘も散見されるが、学習の深さはともかく下記の記述から一定の学びがあることが確認できる。

S5：外国に行くことでむしろ日本の特異性に気づけたことも、今回の収穫の一つになった。

この記述は、西江大学での追加プログラムに対する大学の柔軟な対応や、西江大学での韓国経済を考える授業での日韓の制度の柔軟性の比較などを受けてのものである。比較的短期での異文化体験は浅い水準での学習に終わることが懸念されるが、研修の内容の工夫次第では深い学習も可能であることが示唆される。上記の記述も、単に差異を述べたものではなく、多様な文化の中での日本の文化の特殊性に言及しているものであり、単なる相違の比較というよりはより相対的な観点からの日本の文化の特殊性を指摘している。

S1：また韓国の礼儀や習慣、人間関係を形成する根本にある儒教文化の影響も印象に残っている。自分より年上の人に対しての言葉遣いや態度などに関しては日本よりずっと厳しいものがある。年配者へ常に敬意を払っていることはその言語体系からもわかるということも大変興味深かった（中略）異文化の常識が自分の常識とは全く違うということ、現地で過ごす中で再度実感することができた。

ここでは礼儀や習慣、人間関係などの韓国と日本の文化差について言及がなされている。そして、印象深かった文化差と、言語との関係に考察が

至り、最終的にはそういった言語体系を含む“常識”が、2国間で大きく異なるという気づきを、自分の抱いた印象とともに言及している。単なる文化差、言葉の違いなどに留まらず、それらを相互に関連付けながら、常識といった認識の枠組みにまで考察を至らせている点でS1の学びの深さが窺える記述である。また、こういった思考の過程を報告書にS1が記載したという点も留意すべきである。

6. 今後の展望

このカテゴリは、研修を踏まえて、或は研修中に体験したイベントや学習、現地の学生、本学OBとの交流を通じて何かしらの触発を受け、学生自身の今後の展望に関して言及があったものである。今後の語学学習についての言及が最も多いが、中には将来の職業や、研究・学業に関連した言及もみられた。このカテゴリに該当する記述は6名全員の報告書に見られた(100%)。具体的な例としては

S2: この研修を通じて友達になれた韓国の学生ともう一度会って話をしてほしい。また韓国でお仕事をされている先輩方の姿を見て、韓国語を活かせるような仕事に就くことも選択肢の一つになった。(中略)韓国にいたときのような貪欲さで勉強を継続する。さらに、日韓関係を扱う講義を受講し、常に日本と韓国の関係を意識しながら韓国についてより深く研究していくつもりだ。

上記では、一橋大学OBや現地学生との交流に刺激を受け、語学だけでなく、将来の仕事の選択肢、人生の選択肢が学生の主観として開けていることが見て取れる。加えて、その将来に向けての学業計画、継続して保持すべき問題意識についても具体的に記載されている。このように、学生によっては短期の研修とはいえ、人生やキャリア、将来の展望を考える契機として役立っていることがわかる。

7. 交流（他大学・OB・現地の学生等）

このカテゴリは、研修中に交流した様々な人との交流から得られた学びや経験についての記述からなる。韓国西江大学での研修であるため、当然現地学生との交流が主たるものであったが、同じ研修を受けた他大学の学生から刺激を受けたり、一橋大学 OB 組織との交流を通じて様々な体験や学びがあったことが示唆された。

S1：次に現地での韓国の学生・一橋大学 OB の方々との積極的交流についてだが、実は私がこの研修の中で自分に一番変化をもたらしてくれたのはこの人々との交流の部分だと思っている。

S2：韓国の学生たちと接することで、勉強しなければという気持ちになったのも確かだが、加えて、韓国でご活躍なさっている一橋大学の先輩方との交流会もモチベーション向上のきっかけとなった。（中略）先輩方の見識ある深いお話を聴くうちに、社会の出来事に広くアンテナを張り国内・国外情勢に広く関心を持つことが今後重要になってくることをひしひしと感じた。

S1 は、現地の学生との交流や現地で働く一橋大学の先輩との交流が、様々な語学学習や異文化での生活よりも自分に大きな変化をもたらしたとしている。また、S2 の記述からは、一橋大学 OB との交流を通して、勉強、心構えなど様々な学びがあったことが示唆される。

更に、現地学生や OB だけでなく、現地で知り合う他大学の日本人学生との交流からも、様々な学びが生じ得るようである。例えば

S2：また、私にとって意外な収穫だったのが、他大学の学生との交流である。J 大学の学生は海外経験が豊富な学生が多く、海外旅行を何度も経験している学生や、一時期海外に住んでいた学生など、皆バッ

クグラウンドが多彩であった。そのため、彼女らの海外での体験談を聴くのは非常に面白かったし、私も行ったことのない様々な国人行ってみたいと思った。普段他大学との縁がない私にとって、あまり出会わないタイプの人たちだったのでとても面白かった。

上記からは、他大学から同じ研修に参加している学生との出会いが海外への興味を引き、多様な価値観をもった人との交流が重要であることへのS2の気づきを示している。こういった、一見すると副産物的な学びもS2にとっては非常に重要な学び、経験と受け止められている点には留意する必要がある。

8. 海外志向

このカテゴリは、短期海外研修を終えて、海外に出たいという強い動機や留学計画についての言及からなる。一般に、海外の文化に触れることで留学の意欲が高まることが知られている（例えば河合，2011）。よって、本研修でも多くの記述がみられることが予想されたが、今回の研修参加者の報告書では2名の記述のみに留まった（33.33%）。例としては

S6：三つめの目標は一年留学の候補の一つとして参考になるような生活を送ることであった。（中略）ただ、韓国で何を具体的に学びたいか、その経験を日本に帰ってきてからどう活かすことができるのかと行ったことがまだ漠然としている。今回の経験からさらに考えを深めてしっかりとした将来の計画を立てて留学を考えていけたらいいと思う。

S6はもともと留学の意思があって研修に参加したことがわかる。この研修を長期留学の判断材料とするため、本研修に参加したようである。しかし、研修を終えてなお、明確な留学の目的やどのような留学の成果が得

られるのかについて明確になっていない様子がわかる。それと同時に、留学について考えるべき問題がより明確化されており、本研修が決断を下すための一助となっていることが指摘できる。

このように学生の海外への興味を喚起するという効果はみられたものの、その数は2名に留まった。これは、学生に課された報告書が“どの程度当初立てた自分の目標が達成されたか”という観点から記述されたものであったため、研修に刺激を受けて留学について考えると行った類いの記述が少なかった可能性がある。しかしその一方で、短期海外研修の大きな目的すなわち、長期への留学を促進すること勸案すると、今後の学生の留学計画に具体的に資するような研修プログラムの改善が必要だと考えられる。

9. 歴史問題・歴史認識

このカテゴリは、日韓にまたがる歴史的問題（竹島問題や従軍慰安婦問題）についての言及からなるものである。本研修では、西江大学において韓国学の授業（韓国の政治・経済・歴史等について学ぶ授業）が組み込まれている。この中で竹島問題も扱われたことから、学生の報告書においても5名と多くの記述が見られた（83.33%）。とはいえ、他に授業で扱われたはずの政治的な内容や経済に関する記述などはカテゴリを形成するほどの記述量が見られなかったことから考えても、学生の関心を強く引いた事項であると考えられる。

S4：今回の研修では多くの気づきがあった。（中略）その中で一番記憶に残っているのが、日本人と韓国人の竹島に対する認識の違いだ。

S4は、現地学生との交流や語学など様々な刺激がある中で、上記の歴史認識について一番印象的だったと述べている。報告書が作成された段階は、研修終了後であり、時間がかなり経過しているにもかかわらず記述されていることから、S4にとっては印象深い体験だったと考えられる。ま

た、普段聞きづらい案件で、現地で築いた関係があるからこそ聞けたという点を重視した学生もいた。

S1：(研修で接した人が)日本に対し好感を抱いているという話をきいて嬉しく思った一方、反日感情を持っている人の多くが歴史の影響を受けた父母・祖父母世代だという話もきいた。(中略)こうした話題は日本に韓国人の留学生がいてもなかなか聞くことができず、また触れようとしていなかったことなので直接話を聞き、知ることができてよかった。

このように、準備されたプログラムや現地での学生の交流を通して、学生たちに韓国との関係や、日本の歴史について再考を促すよい契機を提供していることが示されている。このような学習機会は、韓国研修の特殊性でもあり、より準備された研修によって更なる学習効果の高まりが期待できる。

総合考察

本論文では、短期海外研修の教育的効果を多面的に探索することを目的として、学生が作成した研修報告書の分析を行った。その中で明らかになった点は、今までの短期海外研修に関する知見を再確認するもの、例えば、語学における研修の有効性(1)や、異文化体験を通じた学生の学び(5)、交流(7)からの学びなどが確認された。これらのことから、本研修の効果を測定するという点においては、他の研修と同じような側面での教育効果があることが示唆された。更に、交流の側面では現地の学生との関係だけでなく、他大学の学生や大学OBとの交流などからも大きな学びがあったと学生は受け止めていた。このことは、従来の研修で意図されていたものとは異なるリソースからの学びの可能性を示唆している。

上記に加えて、困難・トラブル・フラストレーション (2)、学習上の工夫・努力 (3) では、生じた困難に対して個々人が工夫をしながら学習をしたり、時にはアイデアを友人間でシェアしたりといった言及があった。これらの行動は自発的に問題に取り組む姿勢の現れであり、問題解決を含んだ能動的な学習の態度の現れと捉えることができる。これは後で述べる社会人基礎力と大きく関連する要素であると考えられる。

上記で捉えられた学び以外に、(6) 今後の展望に代表されるような、新たな学生の学びを捉えることができた点は意義深い。どうしても短期海外研修という授業名を聞くと、学生は語学や異文化体験に思考が凝り固まりがちである。しかし、本プログラムでは一橋大学 OB 組織との交流や、韓国学等を通して、働くことの意義や自分のキャリア、アジアの歴史・社会問題を考える時間が確保されている。こういった多様な交流や講義を研修に組み込むことで、研究や将来のキャリアについて検討を促すよい契機となり得る。実際に報告書では、一橋大学 OB との交流によって、海外で働くことの意義や語学学習の目的とキャリアの関連など深い洞察が表現されており、現在において、研修が単なる語学の学力向上を目指したものとして学生に捉えられていないことを示している。

また、研修実施地の特徴が反映された学びとしては、(4) 学習に関する刺激・モチベーションでの記載の一部、(9) 歴史問題・歴史認識が該当するだろう。(4) の多くの記述は、韓国学生の勤勉さを見聞きしたことによる自己の学習不足の反映や、今後の勉学への決意などであった。もちろん、研修の訪問先それぞれに特徴があるのであろうが、韓国は学生の海外志向や能力を高めるという意識が高い点、研修先の西江大学の学生が勤勉な点などは学生の勉学に対する動機づけを高めることに大きく寄与していると考えられる。加えて、(9) のような問題意識は日韓関係上特有のものであり、こういった研修を通してこそ、深く考える契機とり得る。こういった機会でもなければ、日本のキャンパス内で韓国人留学生と、こういったデリケートな問題はなかなか聞きづらく、普段は考えること自体回避されが

ちな問題であるように思われる。実際、そのような記載が学生の報告書にも散見され、またそのような学習や考える機会を肯定的に捉えている。このように、日本との関係上特別な意味合いを持つ韓国での短期海外研修の実施は、他の研修では加味できない重要な学びの観点を提供できる。

社会人基礎力・一般教養という観点からの短期海外研修

学生の記述を社会人基礎力の観点からみると、短期海外研修が学生の基礎力を高めるのにとっても相応しいプログラムであることが確認できる。象徴的な場面としては、S5の例がわかりやすい。S5は、語学クラスの受講生に事前の語学習熟度のばらつきがあり、そのためクラス全体の進度の遅さに不満を感じていた。そこで、韓国語担当教員に積極的に働きかけ、授業の進め方の変更を迫った。また、急遽組み込まれたプログラムについても、プログラムの忙しさと学生の体調面から、担当者に柔軟な対応を交渉するなど、自らが積極的に動いて問題の解決、改善への行動をとっていた。

この事例に限らず、報告書の中ではしばしば学生自らが問題を発見し（社会人基礎力の構成要素：課題発見力）、主体性を持って（主体性）、問題解決に向けて適切な相手と交渉し（働きかけ力）、実際に問題を解決していった（実行力）様子が散見される。こういった要素は、意図的に計画されて研修プログラムに組み込まれるといった類いの要素ではない。しかし、海外での生活を一定期間過ごすなかで、同型ではないにせよ、予期できない様々な問題や困難に直面せざるを得ない。このような問題を成長の機会と捉えるか、処理されるべき単なる障害と捉えるかで、学生の学びにも大きな差が生じると考えられる。更にいえば、予期できない問題とその解決に事前に学生の問題意識を向けさせることができれば、より高い教育的効果を見込むことができる。例えば、事前研修の中で、様々な起こりうる問題や困難を学生に想定させ、それらへの創造的な解決策を事前にシミュレーションしておくことで、現地での多様な問題を学びの場面へと切り

替える支援が可能ではないだろうか。

それに対して、チームで働く力の下位要素である、発信力、傾聴力、ストレスコントロール力などについては、学生の記述から関連する学びがみられておらず、加えて研修の中でこれらの能力をどのように高めることができるかは課題として残される。もちろん、全ての能力の開発を目指したプログラム作りは困難であるが、短期海外研修は学生への金銭的負担も決して軽くないことから、より多方面からの教育的効果を想定してプログラム作りがなされることが望ましい。

今後の課題

本調査では、学生の研修成果に対する意味付け・解釈という側面から短期海外研修（韓国）の教育的効果を捉えることを試みた。従来からの知見を支持する側面も見られたが、研修内容の組み方によっては、より多面的な学生の成長を促すことが可能であることが示唆された。しかし、把握された新たな短期海外研修の教育的効果についてはまだ限定的であり、学生の多様な成長を促すような研修のプログラム内容の検討・改善が今後は更に必要であると考えられる。

本調査が示した1つの大きな視点は、短期海外研修という今までの既成の枠に囚われることなく、多様な観点から短期海外研修と学生の成長を考える枠組みを提供したという点である。これは、今まで短期海外研修の主な目的であった異文化体験や異文化コミュニケーション等の教育的側面を軽視するという事ではない。そうではなくて、今までの枠組みだけではなく、より多様な学生の学びが短期海外研修によって達成可能であるということ提案したのである。

しかし、そういった多様な側面の教育的効果を期待するプログラム開発には、学生がどのように研修前・研修中・研修後と変化を遂げていくのかを継続的に観察しなければならない。本論文では、研修後の報告書、即ち

ある時点での学生の研修に対する解釈・評価に基づいた検討であり、学生の変化の過程自体を追うことはできていない。また、自己評価に基づくものであることから、学生が気づくことのできない側面についての検討が十分ではない。1つの解決策としては、教員が研修に帯同し、学生の細かな変化をつぶさに記録するという方法が考えられる。

他の今後の課題として考えなければならないことは、研修中の学生の学びをより高めるために、どのような手段を講じる必要があるかという点である。研修によっては、先に述べたように教員が引率する場合がある。しかし、職員が引率する場合や本研修のように、事前・事後研修しか教員が対応できないものもある。教員が学生を引率できない場合、学生の日々の学習を促進するような介入を実施することはできず、用意されたプログラムをこなすことで得られる教育効果が主たるものとならざるを得ない。もちろん、準備されたプログラム以外でも、学生は考えながら様々な問題に対応し学びを得るのだが、学んだことを学生自身に気づかせるといったリフレクションや、学生の日々の問題解決により意識をむけさせるという支援があれば、より高い教育効果が期待できるに違いない。教員が引率できない場合は、メールやインターネット等を介して、できるだけ学生の学びを把握し、学生に気づきの機会を促すような支援体制が効果的かもしれない。今後は、予めそういった学習システムが組み込まれた研修プログラムの立案・改善を行う必要がある。

技術的な問題としては、本調査は学生の研修後における研修成果の解釈・位置づけとしての報告書の分析であったため、客観的な指標を用いての研修の効果の測定が必要と考えられる。しかし、本調査の主な目的は、研修の教育効果について多様な側面、新たな側面を見出すことであった。即ち、従来の客観的な指標で捉えやすい側面（語学力等）以外の側面での学生の学びを抽出することであった。一般的な研修効果としてあまり主張されてこなかった、OBや他大学の同じ日本人学生との交流からの学びなどが一部見出されたが、まだ十分とは言い難い。今後、さらなる検討が必

要である。

技術的なもう一つの問題としては、比較対象がないという問題である。一般に、教育的効果を検討するには、特定の要因操作と比較対象が必要である。比較すべき対象を設けることが難しい短期海外研修のような授業では、どのようなプログラム策定や教育的介入が学生に成長をもたらしているのかについて客観的に判断を下すことが難しい。従って、今後は学生個人の事前の状態、即ち学習前の学生の状態（ベースライン）を把握し、研修後と比較するといったことが必要となる。その際には、どのような観点での学生の学びを研修効果として期待するのかについてある程度整理しておく必要がある。

引用文献

- Ericsson, K. A., & Simon, H. A. (1993). *Protocol analysis: Verbal reports as data* (rev. ed). Cambridge, MA: MIT Press.
- 河合淳子 (2011) 大学における学部学生の留学促進 ウェブマガジン「留学交流」5月号
- 苅屋剛彦 (1998) 変わる日本の大学：改革から迷走か 玉川大学出版部
- 工藤和宏 (2011) 短期海外研修プログラムの教育的効果とは——再考と提言——ウェブマガジン「留学交流」12月号
- 経済産業省 (2010) 社会人基礎力 育成の手引き——日本の将来を託す若者を育てるために——朝日新聞出版
- 小林康夫 (1998) 大学教育の意味を再考する：大学で何を学ぶか 佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典 (編) 変貌する高等教育 (pp. 315-330) 岩波書店
- 渡辺留美 (2009) 「短期海外研修のプログラム作りと課題——大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実践報告」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第13号 pp 75-82
- 横田雅弘・白土悟・坪井健・太田浩・工藤和宏 (2006) 「岐路に立つ日本の大学——全国四年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告」『文部科学省研究補助金 (基盤研究B) 平成15年-17年度調査最終報告書』